

展示報告

# 「川合安平上海写真コレクション」 の世界一写真展実施報告

【第1回】会場：横浜キャンパス 3号館企画展示室

会期：2024年5月23日（木）～6月16日（日）

【第2回】会場：みなとみらいキャンパス 1Fプロムナード / 展示・体験エリア

会期：2024年6月26日（水）～7月6日（土）

中村 裕史（非文字資料研究センター 職員）

## —展示まで—

「川合安平上海写真コレクション」は2022年に租界・居留地班の田島奈都子氏（青梅市美術館）からの推薦があり、センター内で検討した結果、寄贈を受けることになった。受入れ後、フィルムの状態が良好であったため速やかにデジタル化を完了させた。つづいて、活用のための基礎作業として目録作りに着手した。目録作りは、高木幹朗研究室スライドフィルム（高度経済成長期の横浜写真）の目録を担当した紙芝居班の松本和樹氏（横浜都市発展記念館）から助言をいただきながら大学院博士後期課程の東家友子氏が担当し、2023年度中に完了させた。その間、中村が『非文字資料研究センター NewsLetter』に紹介記事を執筆した（50号、51号、展示会後に52号）。受け入れの経緯については孫安石研究員が50号に執筆している。2023年度末、2024年5月からの展示実施に向けて写真40枚を選定してパネルの制作を外部業者へ依頼した。その際、4つのテーマを設定した。すなわち、(1) 黄浦江とバンドの風景、(2) 中国人の生活、(3) 日本人と外国人の生活、(4) 上海の歴史建築、である。4月に入り、写真40枚のキャプション作りを孫研究員、東家氏、中村で分担。締め切りは5月連休明けとした。

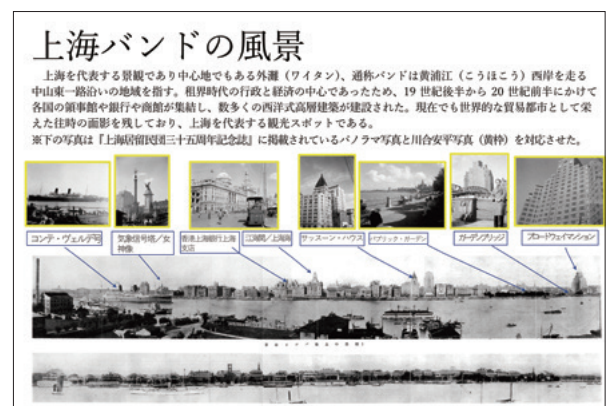
## —展示説明—

入り口には展示の開催趣旨とともに、大きく引き伸ばした『大東亜南洋精図』（1941年）を貼りだした（以前、海外神社班の展示の際に作成）。これによりかつての大東亜共栄圏の中での日本と上海の位置関係が把握できる。

展示室に入っすぐの第1面の冒頭には、『最新上海地図』（1939年）、「租界」の説明文、上海略年表を掲示した。略年表には戦争に関係する出来事を中心に掲載しつつ、川合氏が上海勤務をスタートした年と戦争末期に上海を離れた年を入れた。地図により地理的空間軸、年表により時間軸を念頭に置きながら、つづく写真を見てもらうことを意図した。



第1面“黄浦江とバンドの風景”。写真を連続した一つの街並みとして把握するためには黄浦江に沿って立ち並ぶ高層建築のパノラマ写真が効果的である。『上海居留民団三十五周年記念誌』（1942年）に掲載されているパノラマ写真に川合写真を対応させて解説パネルを作成した。これにより上海の代表的景観を立体的に捉える視点を持てるようにした。



第2面“中国人の生活”。人々の日常生活に向けられたまなざしが川合写真の魅力の一つである。出来るだけ当時の雰囲気を想像しながら写真を見てもらう工夫として、当時の新聞・雑誌記事や芥川龍之介『上海游記』



(1921 年) 等の文学作品などを活用した。これにより写真に物語性が生まれ、人々の生活が生き活きと奥行きを持って浮かび上がってくる。また、そうした関係資料を調べることがキャプション作りにも活かされた。

第3面“日本人と外国人の生活”。上海神社のお祭りで神輿を担いだり、境内で相撲を取ったり、敷島公園で花見をしたり、どこに行ってもお馴染みの行事に興じる日本人の姿が写されている。それと同時に、インド人の守衛と並んだもの、欧州での迫害から逃れてきたユダヤ人の子供たちの姿を撮影したものなど、国際都市・上海ならではの写真も選んだ。スペースも限られているため、関連する写真は小サイズでパネル化して展示した。例えばユダヤ人の子供2人が椅子に座っている写真に付けられたキャプションには次のようある「アルバムには、この写真の前に、喫茶店内で同じ子供が同じ椅子に座っている様子の一枚が収められており、店内の椅子を屋外に持ち出して子供たちを撮影したものと思われる」。そこで、店内の写真の小サイズのパネルにして展示した。そうすることで、キャプションで読んだ内容に沿って被写体の動きを追うことが出来る。



それとおなじような工夫として、「コンテ・ヴェルデ号の引き揚げ作業風景」<sup>10)</sup> 写真には、沈没する前に川合氏が撮影した優美な姿のコンテ・ヴェルデ号の写真を並

べた。それと同時に、日米交換船の航路図や交換船として活躍する姿を報じた『写真週報』（1942 年 9 月 2 日、第 236 号）を並べた。より深く知りたい人には時間の許す限り追加情報を読んでもらえればと考えた。

2 つあるガラスケースの一つには、寄贈アルバム 2 冊とカメラ、そして撮影した日時と天候や露出の絞り値などが克明に記録されている黒革の手帳を入れた。



デジタルデータを元に作成した無機質なパネルとは異なり、アルバムはセピア色に変色し、長い年月の経過を感じさせる。また、黒革の手帳に記入された几帳面な細かな文字を読めば、海軍施設部建築技師としての川合氏の人となりを感じることが出来るだろう。これは実物を展示しなければ表現できないことだ。もう一つのガラスケースには、第二次上海事変の戦闘で破壊された上海の様子を、『支那事変画報』や『支那事変写真全輯』（1938 年）を使って展示した。そうすることで、川合写真だけを見れば一見平和そうに見える上海も、実は激しい戦争の時代の束の間のひと時を写したものであることが意識できるだろう。そして、もう一度冒頭の上海略年表に戻って阿片戦争以来の激動の上海の歴史に思いを馳せていただければと考えた。



横浜キャンパスでの展示終了後には、みなとみらいキャンパスに会場を移して開催した。



ここでは実物資料を入れるケースが無いいため、古い上海地図（複製）を時系列で並べて都市の変遷が分かるようにしたり、写真アルバムを高精細画像で複製してテーブルに並べたりして、多角的な視点から展示を見ることが出来るように工夫した。



両キャンパスでの展示は好評のうちに閉幕を迎えた。第二弾を期待する声もあり、またの機会があれば開催を検討したいと考えている。

#### 【開催趣旨】

非文字資料研究センターの租界・居留地班は、2022年に、川合康夫氏が所蔵する「川合安平上海写真コレクション」（約1200点）の寄贈をいただいた。川合安平（かわいやすへい）は、1912年に生まれ、1940年8月に佐世保海軍鎮守府で勤務を始め、間もなく、支那方面艦隊設営部に配属を命じられ、1945年3月までのおよそ4年半の間、海軍軍属（建築技師）として上海時代を過ごした。戦後は大阪の安井建築設計事務所で定年退職まで勤務し、2001年に亡くなった。

日本の上海都市研究は、中国の都市研究の中でも多くの蓄積がなされている分野で1990年代と2000年代には、日本上海史研究会による一連の論文集が刊行され、租界・居留地班でも『中国における日本租界—重慶・漢口・杭州・上海』（2006年）、『東アジアにおける租界研究—その成立と展開』（2020年）という研究成果を発表している。

ところが、1941年12月の太平洋戦争以降の上海が日本に占領された、いわゆる「孤島時代」に関連する写真資料は、支那派遣軍の検閲を通過した一部の写真と『支那事变画報』などに掲載された報道写真が殆どで、川合氏のような個人が撮影した写真で、撮影の日時と場所、そして、カメラの絞り値までを克明に追える資料は稀有な記録であるといえる。今回の展示は、川合氏の寄贈アルバム2冊の中から、(1) 黄浦江とバンドの風景、(2) 中国人の生活、(3) 日本人と外国人の生活、(4) 上海の歴史建築に関連するテーマの写真を主に取り上げた。戦時上海の日常生活を垣間見る貴重な機会としたい。

租界・居留地班

第1面 黄浦江とバンドの風景



第2面 中国人の生活





### 第3面 日本人と外国人の生活



### 第4面 上海の歴史建築



【注】  
注) 引き揚げ作業については Newsletter No. 50 の記事を参照のこと。

## — 展示写真とキャプション (一部抜粋版) —

	<b>気象信号塔 (ギュツラフシグナルタワー) とバンドの眺め</b> 徐家匯天文台からの気象情報を受け取り、この塔から旗や気球を使い伝えていた。なおギュツラフとは、中国伝教会を創設したドイツ人宣教師ギュツラフに由来する。1993年の外灘拡張工事の際に東側へ23メートルほど移設され、現在も上海の歴史的建築として親しまれている。		<b>ガーデンブリッジとブロードウェイマンション、そして、ロシア領事館</b> 黄浦江から蘇州河の入り口へ向かう船の背後に鉄橋のガーデンブリッジとブロードウェイマンション、そして、ロシア領事館が写っている。ロシア領事館は、豪華なバロック様式を導入した建築。船の上には洗濯物が干されている。
	<b>香港上海銀行 (HSBC) 上海支店ビルと江海関ビル</b> ドームを備えたHSBCは1923年竣工。スエズ以東の最高の建築と称賛された。その隣はロンドンのビックベンをモデルにした江海関ビルで1927年竣工。当時、時計塔からはウエストミンスター・チャイムが15分ごとに流れたという。文化大革命期は「東方紅」が流されていた。		<b>対岸の浦東 (プートン) へ向かうバンドの渡船場と高層建築</b> 対岸の浦東 (プートン) へ向かう渡船だろう。活気のある一枚。バンドのランドマークとなる高層建築群も壮観だ。香港上海銀行 (HSBC) 上海支店、江海関／上海海関、サッスーン・ハウス、中国銀行総行、ブロードウェイ・マンションなど。
	<b>第一次世界大戦戦勝記念女神像</b> 第一次世界大戦の際、上海にいるイギリス居留民500人が参戦のため帰国し、その多くが戦死した。この記念碑は戦争終結後、シャンハイ・クラブが戦死したイギリス居留民を記念して建設したものである。バンドで最も有名な彫像であったが、日本軍の侵攻により破壊された。後ろの船はコンテ・ヴェルデ号。		<b>コンテ・ヴェルデ号の引き揚げ作業風景</b> コンテ・ヴェルデ号はイタリアの客船であり、トリエステへ上海航路に就航し、ヨーロッパでの迫害から逃れる多数のユダヤ人難民が乗船した。また、浅間丸とともに第一次日米交換船として活躍したことも知られている。しかし、1943年9月8日にイタリアが無条件降伏した後に自沈した。
	<b>ロバート・ハート像</b> ロバート・ハート (英: Robert Hart、赫德、1835年-1911年) は税関総税務長を48年の長きにわたり務め、中国近代史においてよく知られた外国人である。1910年、イギリスの在上海総領事館および共同租界工部局は、イギリス人として上海に残した大きな功績を顕彰するため、バンドにハートの銅像を立てることを決議した。ハート像は1914年に現在の上海海関前に完成したが現在は残っていない。		<b>城隍廟本堂の易者</b> 城隍廟はかつて金山神廟として漢の霍光が祀られていたが、明の永楽年間に城隍廟となる。氏神として、正月、端午、中秋等の節句には上海中の人々が参詣に訪れ賑わった。文化大革命の時には、老城隍廟は襲撃を受けて、神像は破壊され、廟の建物は他の用途に流用されたが、1994年老城隍廟は修復されて、再び道教の寺院となっている。
	<b>華徳路の「義大豊米号」に群がる人々</b> 戦況が厳しくなるにつれ、上海の食料事情は悪化する一方であった。とくに、米などについては厳しい制限が置かれたため多くの人々は主食の米を入手するために長い列を作らざるを得なかった。この写真は、米屋に殺到する人々を写している。また、右側のCiro'sは上海を代表するナイトクラブの商号である。		<b>静安寺路の街頭広告一話劇の「文天祥」</b> 広告の中央にみえる「文天祥」(蘭心大戲院)は、1943年12月15日に公演が始まり、翌年の5月13日までの間、合計186回上演された演目として有名である。「文天祥」は、事実上、抗日戦争を呼びかける内容であった。右側には1943年に李萍倩監督による映画「芸海恩仇記」の広告も見える。

	<p><b>竹かご売り</b></p> <p>堤藍橋エリアで撮影された一枚。堤藍橋とは、黄浦江の支流の海下浦にかけられていた橋の名で、付近で竹籠の生産が盛んだったことにちなむといわれている。</p>		<p><b>曹氏墓園にて</b></p> <p>龍華付近にある曹氏墓園は、綿商人の曹鐘煌（そうちゅうこう）が先祖の墓の所在地に建造した墓園。曹家花園とも呼ばれる。1931年に着工し、1935年に完成した。現在は曹溪公園となっている。</p>
	<p><b>上海神社のお祭り</b></p> <p>この写真は上海の新公園で開催された紀元二千六百年祝典の様子。上海で発行された日本語新聞の『大陸新報』は、当日の様子を「限りなき感激と歓喜、現地圧す曠古の盛典」と表現している。この写真は、奉祝祭典で神輿を担ぐ子供の姿をとらえたものである。</p>		<p><b>「新公園」での運動会</b></p> <p>この写真は、新公園での運動会である。運動会では、軍用犬の訓練模様が披露されたほか、各種の陸上競技、相撲大会、ラグビー大会などが実施された。この写真は、婦人のゲームの様子で、後ろの天幕には「サッポロビール」という文字がみえる。</p>
	<p><b>敷島公園でのお花見</b></p> <p>当時「敷島公園」と呼ばれたこの公園は、1929年に完成した葉家公園。貧民から一代で財をなした民族資本家の葉澄衷（ようちようちゅう）の子の貽銓（いせん）が巨費を投じて造営した。葉貽銓は敷地の一部を提供し、1932年には上海最初の肺科専門医院が開業した。現在は肺結核防治院内部の庭園となっている。</p>		<p><b>華徳路のユダヤ人商店街</b></p> <p>上海の虹口にはヨーロッパやロシアなどから戦争を避けて避難するユダヤ人が集合した地域が設定され、「上海ゲットー」と呼ばれたが、1942年以降は「無国籍難民指定区域」としてわずか一平方マイルが居住空間として認められた。広告は、右から左側へ「Lydia」美容室、「Windmill paint」画材店、「ELITE」精肉店、「C.P.C.」ブランドのコピーを販売する喫茶店。</p>
	<p><b>公園にて 子どもたち</b></p> <p>アルバムに収められている前後の写真から、この公園はフランス租界内の繁華街である匯海中路にある襄陽公園と思われる。子ども三人と一緒に映る日本人が川合氏本人である。</p>		<p><b>大連湾路の喫茶店外にて</b></p> <p>川合氏が所属する「支那方面艦隊設営部」本部は、1940年末まで東有恒路（現：余杭路）にあった。東有恒の南側に位置する堤藍橋エリアにはユダヤ人街があり、「リトル・ウィーン」とも呼ばれていた。この子供たちの写真は、リトル・ウィーンの東端を南北に走る大連湾路（現：大連路）にある喫茶店の店外で撮影したもの。</p>
	<p><b>新本部 マックセン（インド人の守衛）、瀧、鶴岡</b></p> <p>当時、上海ではインド系の守衛が多く見られ、「支那方面艦隊設営部」本部でも雇用されていたことがわかる。インド人は、守衛のほか、街角の交通整理などにあたっていた工部局警察官にも多く採用されていた。</p>		<p><b>大世界（ダスカ）</b></p> <p>1917年にオープンした東洋随一の歓楽施設。その後、1930年には青帮の頭目である黄金榮により買収され、さまざまな犯罪の巢窟としても悪名高い盛り場となる。その一方で大衆芸能の殿堂でもあり、上海芸能史を語るうえで重要な位置を占めている。</p>
	<p><b>ブロードウェイマンション（百老匯大廈）と乍浦路橋</b></p> <p>ブロードウェイマンションと、荷物を満載した木造船が列をなしている印象的な一枚。上海のアルデコを代表する建築の一つで1934年に竣工。この写真には建物最上部に巨大な「興亜」の文字が掲げられている。78.3メートルという高さはしばらくの間、アジアで一番高い建物であった。蘇州河に架かる優美な橋は乍浦路橋、その後ろの鉄橋はガーデンブリッジ。</p>		<p><b>パークホテル（国際飯店）</b></p> <p>建築家ラズロ・ヒューデックが手掛けたアルデコ建築の傑作（1934年竣工）。地下2階を含む24階、高さは83.8メートル。当時アジアにおいて最も高い建築物であった。競馬場を見渡せる場所に建っておりキャセイホテルと人気を二分する高級ホテルだった。手前の建物は映画館のグランドシアター。</p>
	<p><b>グランドシアター（大光明大戲院）</b></p> <p>1933年にオープンした映画館。建築家ラズロ・ヒューデックの代表作の一つ。モダニズムとアルデコが大胆に融合したヒューデックらしい建築。ここはアジア初のワイドスクリーンとステレオ音響システムが備わった映画館である。1945年5月には服部良一の企画により李香蘭「夜来香幻想曲」リサイタルが開かれた。現在の外観もほとんど変わっていない。</p>		<p><b>上海競馬場のクラブハウスと時計塔</b></p> <p>現在も残るこの建物は1933年、競馬場のクラブハウスとして建設された。この堂々とした10階建ての塔は、上海中心部のランドマークとなった。戦後は上海博物館や上海図書館として使用され、2000年からは上海美術館となっている。</p>
	<p><b>霞飛路小公園の並木</b></p> <p>1901年に開通した西江路は、1915年に入ると、第一世界大戦を指揮したフランスの将軍の名にちなんで霞飛路（Avenue Joffke）と命名された。この写真は、写真奥の楼閣の建築から霞飛路の蘭維納公園（現在の襄陽公園）を写したと思われる。</p>		<p><b>大東亜戦争博覧会</b></p> <p>博覧会は大東亜戦争の意義を宣伝し、日本の必勝不敗の実力を明示するために1942年11月1日から12月10日にかけて南京の玄武湖畔で開催された。総工費は35万円。施工請負業者は当時国策会社となっていた乃村工藝社。会期中の入場者数は延べ60万人であったという。</p>